

感動最優先、音楽最優先のアルバム作りを推進…fine NF

諸石幸生

ほぼ20年から25年周期でオーディオ・メディアは激変するようである。1950年代半ばから始まったステレオ録音は、1980年に入るとCD時代へと突入した。さらに25年が経過した2005年、時代は一見フォーマットは同じに見えながらもその情報量はCDの6倍とも7倍とも言われるSACDの時代に突入しつつある。SACDの登場はそれほど劇的意味と意義をもつものであり、その計り知れない価値と魅力とを最大限に駆使しながら一枚一枚のソフトを手づくりのような丁寧さと感動最優先のこだわりをもってアルバムにしているのが“fine NF”である。

“fine NF”レーベルは2001年からリリースを始めた新しいレーベルである。社名は“N&F”となるが、このNとFというのは、二人の創設者、プロデューサーの西脇義訓とエンジニアの福井末憲からとったものである。シンプルすぎるほどシンプルなネーミングだが、それだけに責任の所在をはっきりさせると同時に、一枚一枚に制作者の情熱を反映させたい、そんな願いがあるように感じられる。

二人は旧日本フォノグラムの頃から、即ち1980年代から名門フィリップス・レーベルでレコード制作に関わってきた実績を持つ。フィリップス・サウンドの生みの親とされヴィルヘルム・ヘルヴェク、オノ・スコルツェから教えを受け、米テラー・レーベルのジャック・レナーとも親しく交わり、世界的に評価の高い名盤を陰で支えてきた。また両氏はともに過去の名盤を愛し、それらを作り上げてきた歴史的エンジニアへの畏敬の念も強い。中でも、1950年代、マーキュリー・サウンドで一世を風靡したロバート・ファインと、夫とともに名盤をプロデュースしてきたウィルマ・ゴザート・ファインへの讃辞は尽きることがなく、レーベル名を“fine NF”にした程である。

録音対象のジャンルは基本的にはクラシックである。サウンドポリシーとしては、SACDの機能を最大限に生かした何よりも自然で、かつ魅力的な音ということになる。

もっとも、「自然なサウンド」を標榜するレーベルは世界に数多い。耳に心地よい音、自然な広がり感のある音、演奏者の性格が自然に感じ取られる音というのは、どのレーベルにも共通した普遍的目標のようだが、それは時に制作サイドの逃げ口上のように感じられるケースがなきにしもあらずである。

その点、この“N&F”は「自然に」ということを逃げ道にせず、こだわりと責任をもつ

て積極的に「自然に」の意味と性格とを追求している。

一枚のアルバムは演奏家の肖像であり、演奏という名の作品である。しかし、それは同時に、感動を聴き手に送り届ける商品でもある。その大原則がある以上、録音制作者は録音に責任をもつだけでなく、時には演奏家側に積極的に働きかけ、アイディ

アを出し合い、より完成度を高めなくてはならない。妥協ではなく、両サイドがよりよいものを作り出そうと最大限の努力と情熱とを傾けた成果が一枚のアルバムとして実るのであり、そこにある豊かさが自然な演奏の息吹きとなって聴き手を納得、魅了していく…そんな潔い制作ポリシーをもつレーベルである。

最先端のテクノロジーが不思議に顔を出すことはなく、豊かな空間性をじっくり堪能させてくれる

こうした背景からも分かるように“N&F”のアルバムに、ユニークさや話題性を狙った一過性の要素はない。音楽ソフトは未永く聴き継がれていくものであり、そのためには時間も経費も多くが費やされていく。これまでのリリースを振り返ると、年間2枚程度であり、これはビジネス的に少なすぎるように思われなくもないが、彼らに言わせればこれも「当然」なのであり、それだけ一つの仕事は重いのである。

アルバムはすべてSACDハイブリット・ディスクであり、通常のCD、SACD仕様の2チャンネル・ステレオ、そしてマルチ5.1チャンネルを一枚の盤に含んでいる。創業の2001年の時点でこうしたマルチ・ディスクのリリースを行ったのはまさに先駆的偉業であった。またその後に出現した多くのハイブリット・ディスクがマルチ・サウンドを基本とし、2チャンネルはその流れでのミックスダウン処理といったサウンドを聴かせたのに対し、“N&F”はそれぞれのフォーマットで納得のいくサウンドを追求してきたのも誇ってよい事実であろう。

このようにテクノロジーへのこだわりは徹底しているが、アルバムを聴いての感想は、

不思議にテクノロジーが顔を出すことはなく、常に音楽について語らせる。長岡京室内アンサンブルにしろ、神谷郁代のベートーヴェンやグリーグのピアノ協奏曲にしろ、リアからは相当の音量が実際は出ているにもかかわらず、聴いた感じは驚くほど控えめで、自然である。だが、それはクラシック音楽の響きの特質をよく知っているからこそその奥行きであり、作られたサウンド、演出効果といったものは徹底して排除された結果といえる。

とかくサウンド指向への誘惑密度が高い大鼓の「大倉正之助」、水野 均による「パイプオルガン」なども決して際物めいたものになることがなく、楽器の特質と豊かな空間性とをじっくりと堪能させてくれる優秀録音である。

“N&F”は、マルチであることがセールスポイントになる時代はやがて終わり、聴き手はより成熟し、感動の密度、サウンドの自然な深みと味わいの豊かさなどでSACDを評価するようになると、長期的視野にたつて制作を続けている。テクノロジー最先端にありながら最先端を標榜せず、あえて地道に感動最優先、音楽最優先のアルバム製作を続けているのが“fine NF”である。